

No.2809

20世紀前半インドネシアにおけるイスラーム諸団体の連携と対植民地政府活動

早稲田大学大学院文学研究科 博士後期課程

土佐林 慶太

研究目的と活動概要

住民の9割近くがイスラームを信奉するインドネシア（1942年まではオランダ領東インド）において、植民地期末期のムスリム運動は、イスラームを社会的に無視できない原理として浮上させる重要な契機となった。本研究は、1920年代から40年代のインドネシアにおけるムスリム勢力の団結運動に焦点を当て、彼らが内部での対立を抱えながらも、これらの運動を通して協調して指向したものは何だったのか、またこうした運動が独立後のインドネシア社会に果たした役割について、オランダ植民地期、日本軍政期、独立闘争期における連続性と断絶の視点から探ることを目的とする。

上述の研究課題を分析するために、2017年7月30日から9月29日及び2018年1月28日から3月29日にかけて、オランダでの資料調査を行なった。国立公文書館（デン・ハーグ）では、オランダ植民地政府と本国の交信文書であるメールラポルト

（Mailrapport）を、ライデン大学附属図書館では、研究書や論文などの二次資料を中心に収集した。また2017年12月21日から31日にかけて、インドネシア国立図書館での資料調査を行ない、当時インドネシアで発行された定期刊行物を収集した。

研究成果

これらの調査を通して、インドネシア独立後にムスリムの社会進出が進められた背景として、オランダ植民地期におけるムスリム団結運動の重要性を明らかにした。従来の研究では、日本軍政期の対ムスリム政策による結果としての側面が強調され、オランダ植民地期のムスリム運動はあまり詳しく検討されてこなかった。本研究では、オランダ植民地期のミアイ（Madjlis Islam A'laa Indonesia, M.I.A.I、インドネシア・イスラーム最高評議会）に着目し、メッカ居住者帰国事業や諸政治団体との連携を通して、ミアイが「インドネシア・ムスリム」の代表としてムスリムの社会的、政治的基盤となる過程を実証的に考察した。

こうした成果は、東南アジア学会・第98回研究大会における個人研究発表（題目：ミアイによるメッカ居住者帰国事業と政治参加）やブックレット（『20世紀前半インドネシアのイスラーム運動－ミアイとインドネシア・ムスリムの連携－』風響社、2017年）で公表した。